

## 科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成25年5月28日現在

機関番号：10101

研究種目：基盤研究(B)

研究期間：2009～2012

課題番号：21320111

研究課題名（和文） 近代化とグローバル化の文脈における比較帝国史

研究課題名（英文） Comparative History of Empires in the Contexts of Modernization and Globalization

研究代表者

宇山 智彦 (UYAMA TOMOHIKO)

北海道大学・スラブ研究センター・教授

研究者番号：40281852

研究成果の概要（和文）：

19-20世紀の諸帝国史を比較研究し、帝国が周縁や植民地でとった政策における保守主義と近代化の関係、被支配者側が帝国に対して行った協力・抵抗と近代化・ナショナリズムの関係、諸帝国が互いに争いつつも共存しグローバルに経験を参照し合った競存体制を考察した。また、帝国権力と社会の関係には一定の普遍性が見られると同時に、近代化や帝国競存体制への参入時期の違いが各国の特徴の違いを生んだことを明らかにした。

研究成果の概要（英文）：

This is a project on comparative research of empires in the 19th and 20th centuries. We elucidated the policy of conservative modernization in colonies and peripheries of empires, as well as colonized peoples' collaboration with and resistance to empires in the age of modernization and nationalism. Empires constituted a global regime of competitive coexistence, and referred to each other's experiences. The time and circumstances of modernization and entry into this regime largely determined each empire's characteristics.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2009年度	3,900,000	1,170,000	5,070,000
2010年度	3,500,000	1,050,000	4,550,000
2011年度	4,400,000	1,320,000	5,720,000
2012年度	3,500,000	1,050,000	4,550,000
総計	15,300,000	4,590,000	19,890,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：史学

キーワード：比較史、東洋史、西洋史

## 1. 研究開始当初の背景

近年、帝国論・帝国史研究は世界的に盛んになっているが、9.11事件後に流行した国際政治学や現代思想における帝国論と、歴史学における帝国史研究の間には隔りがある。また帝国史研究の中でも、個別のテーマの実証的研究と、構造論、類型論、帝国主義論、ポストコロニアル論などの理念との間に時

に乖離が見られる。本研究は、さまざまな理論を批判的に摂取し、また個々の帝国の研究から生まれた知見を他の帝国に柔軟に適用しながら、近代の諸帝国の特徴と、帝国間・地域間の相互作用を解明すべく構想された。

## 2. 研究の目的

本研究は、19-20世紀のロシア、イギリス、

中国（清）、日本、西アジア（オスマン帝国・イラン）、アメリカを主な対象とし、以下のことを課題とした。

(1) 帝国と近代：近代という時代は、帝国に対して、君主と国家と社会との関係の再編、能率的な官僚制の形成、緩やかな人的統合から面的・領域的支配への転換、辺境に関する知識の蓄積と世界観の形成など、さまざまな課題を突きつけた。国際関係においても、国境の明確化・国境管理や、皇帝を世界の頂点とするコスモロジーと主権国家体系のもとの国際法との調整が必要となった。こうした問題に諸帝国がどのように対応したかを比較する。

(2) 帝国と民族：帝国は、中心部とは文化的に異質な空間を抱えていることを特徴とするが、そのような空間の住民たちが政治意識を強めることによって、帝国にとって特に対処の難しい問題である民族問題が現れた。ただしこの問題は、単に「抑圧」からの「民族解放」という性格だけを持っていたのではない。帝国権力がオリエンタリズム的な知識や観念を用いながら諸民族をどのように分類・把握し統治しようとしたか、諸民族が帝国の作り出した観念や制度をどのように利用しながら自らの利益を実現しようとしたか、そして両者の相互作用の中でどのような差別構造や駆け引きの関係が生まれたかを分析する。

(3) 帝国と国際秩序：19世紀を広義のグローバル化の時代としてとらえ、それぞれの帝国の内政と外交の関わりや、地域的なネットワークと帝国権力の相互作用を解明することを通して、イギリス帝国を中心としながらも地域的に多様な展開を見せた近代国際秩序のあり方を考察する。

### 3. 研究の方法

帝国史研究の基礎となる史料の収集を、海外調査と図書資料購入の両面から進めた。特に、ロシア帝政期中央アジア史に関する文献資料コレクション「トルキスタン集成」のデジタル版を購入し、この分野の研究の資料的基盤を大幅に強化した。

メンバー全員と外部からの講演者を交えて議論を行う研究会を年2回程度開いた。たとえば、2010年4月24日の研究会「比較帝国論の方法を考える」では、木畑洋一氏らを招いて、イギリス帝国史研究の蓄積に基づく帝国の階層的構造や脱植民地化に関する論点と、進展著しいロシア帝国史研究から出てきた認識論や越境論の論点を突き合わせ、さらに他の帝国・地域の専門家からのコメントを受けて、比較の方法を議論した。同年9月27-28日の研究会「比較帝国論の具体的展開」では、帝国の狭間に置かれた近代・戦間期中欧での地域認識と地域再編構想、ロシアの

中央アジア統治、イギリスのインド統治、アメリカによる戦後アジア秩序形成におけるコラボレーター役割など、多様なテーマで比較の議論を行ったほか、メンバーが専門とは異なる地域の研究書を読んで書評することを試みた。

また若手による研究報告会を随時開き、ロシア帝国、清朝、日本帝国などに関する最新の研究成果を、比較の文脈に乗せて議論した。

### 4. 研究成果

本研究によって以下の知見が得られた。

(1) 国土と住民を行政機構と学知によって綿密に把握し管理統制する、教育の普及により住民が国民・臣民としての義務をより効率的に果たすことができるようにするといった意味での近代化は、西洋帝国、非西洋帝国、植民地に共通した課題であった。ただし中央とは異質な社会を統治するという帝国の特性から言って、単に近代的な社会・政治システムを押しつけるのではなく、現地の社会構造をよく把握したうえで、全帝國的なシステムに取り込む必要があった。英領インドやロシア領中央ユーラシアでは慣習法やイスラーム法を帝国が調査・解釈したが、日本が植民地で行った旧慣調査にも同様の発想がある。このように各地の社会・文化を調査・分類する学問的・政治的作業は、支配者集団と被支配者集団の統合と差異化の両方向に作用した。また、帝国は多くの場合保守的な政体であり、なおかつイギリス帝国などは植民地の現地有力者層を保存することに熱心であったから、古い社会構造を維持しながら教育や技術の近代化を進める「保守的近代化」という興味深い現象が見られた。

(2) 中央と周縁、大国と小国の間に、非対称ではあるが一方的ではない多様な相互作用が生まれ、地方エリートや民衆が、帝国中央の情報・認識不足を利用して協力と抵抗を随時切り替えるという現象が多く見られた。そうした協力や抵抗が、教育などの近代化の進展ないし近代化の必要性の認識と結びついた時、ナショナリズムの運動が出現・成長した。ただし民族・国民以外のアイデンティティ、特に宗教の意義がそれによって消えたわけではない。帝国の現地社会への関与において宗教者層が重要な役割を果たしたことは、ロシア帝国史などの研究で既に指摘されているが、日本帝国が大陸に進出する際にも、仏教徒やムスリムに対する「工作」が一定のインパクトを持っていた。

(3) 帝国は互いに覇権争いをしながらも、国際関係を大国間の秩序として維持することに利益を見出すという、競存体制を構築していた。帝国の統治モデルにおいても、それへの抵抗の方法においても、グローバルな規模での相互参照がなされ、帝国間や抵抗勢力間

で必要に応じ情報・知識の提供も行われた（日本の台湾出兵の際の、イギリスによる地図・海図提供など）。他国の経験の参照過程を探る史料として、国王、官僚、宗教者などによる旅行記の重要性も指摘された。

(4) 帝国に関するさまざまな概念の吟味と深化、および新しい概念の提起を行った。研究分担者の山室信一は、国民帝国と空間学知の関係を考察し、軍が集めた地理情報など「隠された学知」の重要性を指摘した。池田嘉郎は「共和制の帝国」という概念を考案して、ソ連体制における専制と共和制、帝国と国民国家の結合を分析した。イギリス帝国論で育まれてきたコラボレーター論が、ロシア帝国やアメリカ「帝国」にも適用できることが多くのメンバーによって示されたほか、外国人研究協力者の一人ジャナト・クンダクバエヴァ教授（カザフ大学）は、カナダインのオーナメンタリズム論（イギリス帝国統治における褒賞や儀式的役割）のロシア帝国への適用を試みた。これらの作業を通して、諸帝国の特徴はたとえば大陸帝国と海洋帝国という二分法によってきれいに整理できるものではなく、帝国に関わるさまざまな階層の権力間、および権力と社会の間には一定の普遍性が見られること、むしろ国際的な帝国競存体制への参入の仕方や近代化の時期、内外の脅威への応答のあり方によって、各国の特徴の多くが形作られたことを明らかにした（産業革命で先行したイギリスの自由貿易主義と、経済的に劣位なロシアの領土安全保障重視、遅れて登場した帝国・日本の加速的帝国主義と、その脅威を受けた中国の主権意識強化など）。

##### 5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 59 件）

- (1) 宇山智彦、「セミパラチンスク州知事トロイツキーとカザフ知識人弾圧：帝国統治における属人的要素」、『新史料で読むロシア史』（中嶋毅編、山川出版社）、査読無、2013年、pp. 74-91
- (2) 宇山智彦、「帝政ロシア支配の実像とロシア・ムスリム知識人たち」、『中央アジア（朝倉世界地理講座5）』（帯谷知可・北川誠一・相馬秀廣編、朝倉書店）、査読無、2012年、pp. 173-182
- (3) 宇山智彦、「ロシア帝国論」、『ロシア史研究案内』（ロシア史研究会編、彩流社）、査読無、2012年、pp. 165-179
- (4) Shin Kawashima、A Prototype of Close Relations and Antagonism: From the First Sino-Japanese War to Twenty-One Demands, Daqing Yang, Jie Liu, Hiroshi Mitani and Andrew Gordon, eds., *Toward a History Beyond Borders: Contentious Issues in Sino-Japanese Relations*, Harvard University Press, 査読有、2012年、pp. 53-80
- (5) Tomoko Morikawa、Pilgrimage to the Iraqi 'Atabat from Qajar era Iran、Pedram Khosronejad (ed.), *Saints and their Pilgrims in Iran and Neighbouring Countries*, Wantage: Sean Kingston Publishing, 査読有、2012年、pp. 41-60
- (6) 池田嘉郎、「記憶の中のロシア革命—ロンドン『十月のレーニン』とスターリン時代の革命映画」、『ユーラシア世界3 記憶とユートピア』（塩川伸明・小松久男・沼野充義編、東京大学出版会）、査読無、2012年、pp. 101-126
- (7) 宇山智彦、「カザフスタンにおけるジュト（家畜大量死）：文献資料と気象データ（19世紀中葉～1920年代）」、『中央ユーラシア環境史1 環境変動と人間』（窪田順平監修・奈良間千之編、臨川書店）、査読無、2012年、pp. 240-258
- (8) Tomohiko Uyama、Introduction: Asiatic Russia as a Space for Asymmetric Interaction、Uyama Tomohiko, ed., *Asiatic Russia: Imperial Power in Regional and International Contexts*, London: Routledge、査読無、2011年、pp. 1-9
- (9) Shigeru Akita、The British Empire and the International Order of Asia in the 1930s and 1950s、*Yongkuk Yonku (The Korean Journal of British Studies)*、査読有、26巻、2011年、pp. 69-91
- (10) Shin Kawashima、The Development of the Debate Over "Hiding One's Talents and Biding One's Time" (taoguan yanghui): China's foreign-policy doctrine、*Asia-Pacific Review*、査読有、vol. 18, no. 2、2011年、pp. 14-36
- (11) 守川知子、「イラン・ペルシア世界における翻訳文化—インド・ギリシア、アラブ、そして 西洋諸語から」、近藤信彰編『ペルシア語文化圏史研究の最前線』東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所、査読無、2011年、pp. 151-170  
<http://repository.tufs.ac.jp/bitstream/10108/70718/1/B088-10.pdf>
- (12) Shin'ichi Yamamuro、Der Erste Weltkrieg und das Japanische Empire (übersetzt von Jan Schmidt)、*Bochunmer Jahrbuch zur Ostasienforschung*、査読無、34巻、2011年、pp. 21-51
- (13) 山室信一、「第一次大戦の衝撃と帝国日本」、岩波講座『東アジア近現代通史』（岩波書店）、査読無、3巻、2011年、pp. 95-118
- (14) Tomohiko Uyama、The Roles of Small

- Regions in Intercultural Relations and Conflicts: The Bökey Horde, Gorno-Badakhshan and Abkhazia, Anita Sengupta and Suchandana Chatterjee, eds., *Eurasian Perspectives: In Search of Alternatives* (Delhi: Shipra Publications)、査読無、2010年、pp. 64-77
- (15) 秋田茂、「帝国」、『イギリス史研究入門』（近藤和彦編、山川出版社）、査読無、2010年、pp. 272-293
- (16) 守川知子、「イラン史の誕生」、『歴史学研究』、査読有、863巻、2010年、pp. 12-21
- (17) 山室信一、「國民帝國日本的異法域統合與差別」、『臺灣史研究』、査読有、16巻第2期、2009年、pp. 1-22
- (18) 川島真、「領域と記憶—租界・租借地・勢力範囲をめぐる言説と制度」、『模索する近代日中関係—対話と共存の時代』（貴志俊彦・谷垣真理子・深町英夫編、東京大学出版会）、査読有、2009年、pp. 159-183

[学会発表] (計 50 件)

- (1) Tomoko Morikawa, Memory Places and Funerals in the Shi'ite Society, Mythes, rites et emotions: les funérailles le long de la route de la soie (Myths, Rites and Funerals: Dead along the Silk Road) (招待講演)、2013年3月8日、Université Paris 7 Denis Diderot, Amphithéâtre Buffon, Paris (フランス)
- (2) 山室信一、「東アジアにおける近代の多元性について—空間学知と連鎖視点から」、台湾大学人文社会高等研究院・台湾中文学会(招待講演)、2012年12月14日、台湾大学(台湾)
- (3) Shigeru Akita, The Rise of Indian Economic Nationalism and Collaborators at the turn of the 19-20th centuries: N.Y.K. Bombay Line and the British Empire, International Academic Conference on 'Science, Knowledge and the "Art of Governance" of the Periphery in Colonial and Continental Empires', 2012年11月14日、Institute of World History of Russian Academy of Sciences, Moscow (ロシア)
- (4) Yoshiro Ikeda, Toward an Empire of Republics: Transformation of Russia in the Age of Total War, Revolution and Nationalism, Slavic Research Center Winter International Symposium "Comparing Modern Empires: Imperial Rule and Decolonization in the Changing World Order", 2012年1月20日、Slavic Research Center (Sapporo, Hokkaido)
- (5) Уяма Томоико (宇山智彦)、Восприятие международной обстановки начала XX в.

- А. Букейханом и его современниками, Международная конференция «Идея Алаш и Независимый Казахстан» (招待講演)、2011年9月13日、Дворец независимости, Astana (カザフスタン)
- (6) Shigeru Akita, Re-Presenting Asia on the Global Stage: The Rise of Global Historical Studies in East Asia, The 3rd Global History Globally Conference, 2011年10月20日、Humboldt-Universität zu Berlin (Germany)
- (7) Tomohiko Uyama, Central Eurasian Studies in Japan: A Close Combination of Russian and Oriental Studies, ICCEES (International Council for Central and East European Studies) VIII World Congress (招待講演)、2010年7月30日、Stockholm City Conference Centre (Sweden)
- (8) Tomoko Morikawa, "Ziyara" and "Ziyaratgah" in 19th Century Iran, 8th Biennial Conference of Iranian Studies, 2010年5月28日、Doubletree Guest Suites Hotel Santa Monica (USA)
- (9) Tomohiko Uyama, Changing Religious Orientation among Kazakh Intellectuals in the Tsarist Period: Between Sharia, Secularism, and Philosophical Search, Religion and Society in Central Eurasia: New Sources for the Religious History of Kazakhstan, 2009年10月30日、Cini Foundation, Venice (Italy)

[図書] (計 19 件)

- (1) 秋田茂、中央公論新社(中公新書2167)、『イギリス帝国の歴史—アジアから考える』、2012年、総288頁
- (2) 山室信一、人文書院、『複合戦争と総戦力の断層—日本にとっての第一次世界大戦』、2010年、総174頁
- (3) Shigeru Akita and Nicholas J. White (eds.)、Ashgate (London & New York)、The International Order of Asia in the 1930s and 1950s, 2010年、総316頁
- (4) 川島真・毛里和子、岩波書店、『グローバル中国への道程—外交 150 年』、2009年、総 212 頁

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

宇山 智彦 (UYAMA TOMOHIKO)  
北海道大学・スラブ研究センター・教授  
研究者番号：40281852

### (2) 研究分担者

秋田 茂 (AKITA SHIGERU)

大阪大学・文学研究科・教授  
研究者番号：10175789  
川島 真 (KAWASHIMA SHIN)  
東京大学・総合文化研究科・准教授  
研究者番号：90301861  
池田 嘉郎 (IKEDA YOSHIRO)  
東京理科大学・理学部・准教授  
研究者番号：80449420  
守川 知子 (MORIKAWA TOMOKO)  
北海道大学・文学研究科・准教授  
研究者番号：00431297  
山室 信一 (YAMAMURO SHINICHI)  
京都大学・人文科学研究所・教授  
研究者番号：10114703

(3) 連携研究者

古矢 旬 (FURUYA JUN)  
北海商科大学・商学部・教授  
研究者番号：90091488